

循環器内科

(スタッフ)

部長	: 村松 浩平 (5月まで)
副部長	: 古閑 靖章 (5月から部長代行)
	: 新富 將央
	: 古川 正一郎
医師	: 秋山 雄介 (4月から)
	: 岸田 峻 (4月から)
	: 渋谷 優介 (11月から)
嘱託医	: 渋谷 優介 (4月から 10月まで)
専攻医	: 新宮 直人 (4月から)
	: 長友 隆寛 (4月から)
	: 徳本 真弘 (3月まで)
	: 谷口 弦太郎 (3月まで)
	: 山本 優太 (3月まで)
	: 郡山 遥平 (3月まで)
	: 岸田 峻 (3月まで)

2024年5月に、長年にわたり循環器内科部長を務め、大分県の循環器診療に尽力された村松浩平先生が退職されました。以降は当科の部長代行を古閑が務めております。2024年4月からは働き方改革が医師にも適用され、当科の診療にも大きな影響を与えました。新しい勤務スタイルでは、村松前部長時代に掲げていた「365日24時間循環器当直常駐」の看板は下ろさざるを得ず、祝祭日に限りオンコール体制をとる事にいたしました。一方で、「当直後の平日早帰り」「宿直中に実働時間に合わせた代償休憩の取得」など法令を遵守した勤務体制を構築しております。

その他の話題として、当科が最も力を入れている分野の一つである冠動脈形成術（PCI）については、2019年以降大分県最多治療例数を継続できており、2月29日にはおそらく大分県初の全国配信PCIライブ（治療の様子をインターネット配信する企画）である“Educational LIVE Course in Oita Prefectural Hospital”を開催しました。本PCIライブでは、九州内の経験豊富なPCI術者を座長、コメントーターとして迎え、当科の新富将央医師が複雑な石灰化病変、古閑が治療難易度の高い慢性閉塞病変の治療を行いましたが、2症例とも無事に手術は成功し、全国配信PCIライブは盛会に終える事ができました。また2017年以降は、当科で治療を行っている下肢動脈の血管内治療の分野で、11月22日に当科の古川正一郎医師が大きなライブデモンストレーションイベントである“ARIA2024”の中で治療難易度の高い下肢末梢動脈疾患の血行再建を多くの参加者が見守る中で成功し、当科の高い技術力を示す事ができました。この

ように当科の冠動脈・下肢動脈の血行再建技術は他施設の医療関係者が高い関心を示す程のものを誇っており、この培ってきた技術を地域医療に還元していきたいと考えております。

(診療実績)

2024年の冠動脈造影検査は712例、冠動脈形成術は403例（うち緊急77例）、下肢動脈血管内治療は40例でした。大分大学医学部循環器内科のご協力のもと行っているアブレーションは76例（心房細動66例）でした。植え込みデバイス治療は59例でした。その他、着用型除細動器の使用例が6例でした。2024年の傾向といたしましては、デバイス治療に変化がみられ、心臓再同期療法のためのCRTD、CRTPの新規植え込みやアップグレードが増加し、致死的不整脈に対する完全皮下植込み型除細動器（S-ICD）の移植例や着用型除細動器の使用例が増加していました。

表 主な診療実績

冠動脈造影検査	712	下肢動脈血管内治療	40
冠動脈形成術	403	アブレーション	76
- 緊急	77	- 心房細動	66
- ローターアテクトミー	17		
- 血管内石灰化破碎術	24	デバイス治療	59
- エキシマレーザー	25	- リードレススペースメーカー	13
- 慢性閉塞病変	23	- 新規 CRTD/CRTP	9
		- 完全皮下植込み型除細動器	3

(今後の方向性)

開業医の先生方と研究会等でお話しさせて頂いた際に、2019年以降は当科が大分県最多の冠動脈形成術を行っている施設であることや、古閑が赴任した2017年度から下肢動脈の血管内治療は当科が施行していること（以前は心臓血管外科が施行しておりました）、がご存知頂けてなかったことに大変驚きました。質・量ともに充実した治療が出来ている自負がありますので、広報活動にも力を入れてより多くの患者に良い治療を届けていきたいと考えております。

また、2024年から心不全入院された患者の情報のデータベース入力を開始しております。社会的問題となっている心不全の再入院を減らすためデータを活用して治療の最適化をしたいと考えております。

2024年は大変多くの学会発表、研究会発表などを行いました。今後も学術的な活動を継続して、当科の実績を示すと同時に他施設の良いところは吸収し、閉鎖的にならず、謙虚に診療レベルの向上を目指したいと考えております。

（文責：古閑靖章）